

近世文学と地誌（要約）

真島 望

序論

問題の所在と先行研究 本論は、近世地誌を日本文学史上に置き直すための、基礎的作業を試みたものであり、近世地誌研究のいささか角度を変えた視点による序説とも言い得よう。

言うまでもなく、これまでも近世地誌を取り上げる研究は存在し、様々な成果が積み上げられてきたが、近年の成果として特筆すべきは、白井哲哉氏による一連の研究であろう。その『日本近世地誌編纂史研究』（思文閣史学叢書）（思文閣出版、二〇〇四年二月）は、主に官撰地誌を扱って、江戸時代全体の地誌編纂とその思想的背景などに光をあてた。近世地誌を正面から総体的に論じるものとしては、管見の限り近年唯一と思われる。

そのほか、錦仁（和歌）・志立正知（軍記）・平林香織（西鶴・浮世草子）・藤川玲満（名所図会）・板坂耀子（近世紀行文）など各氏によって、それぞれの立場から、近世地誌について興味深い指摘がなされている。

以上のような現状で、本論はいかなる立場をとるのか。結論を先に述べるならば、それは、近世地誌を「（近世）文学」として捉えるという点にある。名所（など）＝歌枕の集成としての意味ももつ日本の地誌は、本来的に文学作品であり、これを読むのは和歌という日本文化の精髓に触れる行為にほかなるまい。それを近世的枠組みの中で行おうというのが本論の試みである。

具体的には、和歌・連歌の近世的変容とも言うべき俳諧と地誌との関わりを主軸として、その生成と伝播の様相を窺うこととしたい。近世に確立した新興文芸であり、和歌・連歌の価値観も内包する俳諧は、観念上の名所であった歌枕が、社会の政治的安定や経済発展をうけて実体化していく時代にあつて、最も鋭敏にその変化に反応し探究することになる。

そして、俳諧に着目する以上、その対象とする地誌は、おのずと民撰地誌ということになる。前掲白井氏は、「地誌の多様性は民間の知識人が作った地誌の事例発掘で確認されたが、その成立に関する研究は必ずしも進んでいない」こと、十九世紀の作品に比して「それと比較されるべき一七世紀及び一八世紀における地誌の特質」が十分に解明されていないことなどを、近世地誌研究の課題として挙げておられる本論はささやかながら、その欠を補うことになるだろう。

また、地域的には、特に江戸文壇で活躍する人物の作品とその周辺を扱うこととする。これは、近世の首府でありながら、都市としては新興の、あえて言えば上方に比して後進地域であつた江戸が、経済的・文化的発展を遂げてゆく中で、そこに生活する人々の、自らの足下に対する意識に生じる変化こそが、近世的地域意識・歴史認識の特色を明快に示すことになると考えるからである。

地誌はなぜ文学なのか 本論の内容と構成に言及する前に、まずは地誌を近世文学として捉えるべき根拠について、いまだ少し私見を述べたい。近世地誌が当時の文学作品にあらゆる水準で利用されているのは事実ながら、そのみを頼りに地誌を文学とするのは乱暴に過ぎるので、その点についての論者の考えを明確にしておく必要がある。

現今、観光地のガイドブックや旅行案内の類、あるいは県史・市史などの自治体史・地方史(誌)を「文学」とする認識は存在しないだろう。また、そういった地方史の先蹤としての近代地誌も同様と思われる。翻って近世の人々が地誌を「文学」と同等に考えていたことを実証するのは、極めて困難ではあるが、地誌が近代化してゆく中で「文学」性を喪失していったのであれば、その捨象され臙化された要素に着目することが、何らかの手がかりになるはずである。

近代化を経た地誌や地図が失ったものの、表層のレベルで言えば、まず端的に名所を詠む詩歌(俳諧・狂歌も含む)がそれに当たる。例えば、官撰地誌(所謂皇国地誌)『日本地誌提要』(明治八(一八七五)〜十刊)は、「詩歌諷詠による自然物を除外」することを凡例で宣言し、近代地理学がこれを「自然科学の態度からは一つの進歩であり、今日のアカデミックな地理書の做うところである」(石田龍次郎『おける近代地理学の成立』(大明堂、一九八四年一月)と評する事実が、地誌における詩歌を、前近代の象徴として捉える認識が存在することを明快に示している。

また、これに付随する要素ではあるが、その土地の(主観的な)歴史叙述(詩歌の詠出事情や、寺社の縁起、地名由来説話などを含む)に重きを置くのもまた、近代地誌との差異と言えよう。石田龍次郎氏は、明治三十六(一九〇三)〜大正四(一九一五)年刊の『大日本地誌』(山崎直方・佐藤伝蔵編、博文館)を、自然科学的記述の増加などの点で高く評価しつつ、「歴史の記述では戦場や戦記の叙述が主とな」っていることなどを、科学性に対して「旧套」と批判するのである。

近代地理学では排除あるいは軽視されるに至った、代表的なこの二つの要素、すなわち土地に関わる詩歌と歴史叙述に共通するのは、情趣や情緒というものではないだろうか。近代合理主義の前では切り捨てられてしまう主情的な側面が、近世地誌を「文学」たらしめているのだと考えられる。そして、地誌の内容に即して言えば、それはある種の価値意識をはらむ、地域ごとの特殊性・個性性とも言い換えられよう。必ずしも実体を伴わない歌枕を重視し、ある土地をその他とは異なる「名所」として相対的に価値あるものとするのは、何よりもその土地が有する固有の歴史(意味ある過去)を根拠とする美感とも言うべき、理屈では証し難い観念なのである。

一方、近代地理学が求めたのは、西欧自然科学に基づく正確な客観的記述であり、それは、地勢・地質・気象などの自然現象についての情報を重視し、土地を物質・物体として把握することであつた。それは、地域ごとの差異を明確にすることにつながり、その点において先述の前近代の地誌と共通するように感ぜられるが、自然科学による計量的把握によって、土地は数値という極めて普遍性の高い同一の記号に還元されることになり、その意味で全ての場所が等価値に帰することになる。

また、同じく近代地誌に欠くことのできない人口や産物などについての統計学的情報というのは、時間の推移とともに絶えず変化してゆく宿命を負っているゆえに、絶対的に最新であることが要求され、この点も、既に過ぎ去った時間に見出す近世地誌の価値観とは大きく異なっている。

当然ながら、近世地誌に客観的要素・合理主義的側面が全く見られなかったということではなく、文芸思潮と同様に漸次醸成されてゆくのであり、また近代地誌が情趣を悉く排除しえたのかと言え、これもまた否である。つまり、あくまで両者の比重がどちらに傾くかの問題であった。

以上粗々と述べてきたけれども、「文学」や「文」という言葉の中国における原義に立ちかえるならば、視覚の美感(紋様)を意味し、転じて文飾ある言辞の謂いでもあった「文」にしても、理性的思考のみならず詩賦文章を含む学術一般(を文に著すこと)を指し示した「文学」にしても、そこには理知・情緒が混在していた(例えば、天文・人文)のであって、決して対立的に存在していたのではなかった(青木正児『支那文学思想史』(岩波書店、一九四三年四月)。その意味で、近世地誌は、実用性を有した学術的編著であるとともに、まさしく「文学」と言うことができる。

また、元禄期に活躍した儒者伊藤仁斎(寛永四(一六二七)〜宝永二(一七〇五)による、詩歌(文学)を人間の本性の表出として捉え、まさにそのことによって独立した価値を見出した「人情論的文学観」は、多少の変化を加えながらも江戸時代の文学論の論拠であり続けた(中村幸彦「文学は「人情を道ふ」の説」(『中村幸彦著述集』第一巻、中央公論社、一九八二年十一月)わけ、この点においても、合理主義的思考が促進する享保以後幕末まで、主情的側面を失わなかった近世地誌は、まぎれもなく「文学」と呼びうる内容を有している。本論において地誌を文学研究の俎上に載せる所以である。

あらゆる分野が極端な合理精神をもつ西欧近代文明に塗り替えられた時、地誌もまた美感や情趣という、本来学術とともにあったはずの一面が、「役に立たぬもの」として切り捨てられ、分化・細分化されてしまった。合理主義を支える理性的思考の恩恵は否定すべくもないけれども、だからと言って、そこで捨象されたものが無価値ということにはならないはずである。近世地誌、あるいは名所の生成やそこに内包される当時の人々の抱いていた歴史意識や情趣などを考察することは、産業革命を経て誕生した近代資本主義の功利主義的志向が追求する、効率化とそれによってもたらされる均質化という力に抗い、これを相対化する一助ともなるだろう。

それでは、以下各章の要約を述べることにする。

第一章 幕儒の学問と地誌(一) —— 幕府御大工頭鈴木長頼の文事

鈴木長頼ながより(号秋峰、明暦元(一六五五)〜宝永二(一七〇五)年)は、貞享〜元禄期(十七世紀末〜十八世紀初)に活躍した、祖父長次・父長常と同じく幕府御大工頭を務めた作事方の官僚であり、元禄元(一六八八)年〜三年の日光東照宮改修、桂昌院仏殿普請(宝永二年)のほか、江戸城内や増上寺などの幕府重要施設の保全に携わった。その一方で、幕府儒官人見竹洞を師として詩文をよくし、『本朝外考』(写本、貞享二(一六八五)序)・『桑華詩編』(貞享二刊)・『倭賦引事』(元禄十三(一七〇〇)刊)・『豆州熱海地志』(同年刊)を編纂し、朝鮮の詞華集『三韓詩龜鑑』を和刻させて梓に上せる(元禄十一刊)など、海外も含めて、空間的に拡がりをもった文事にも積極的であった。

本章では、これまでほとんど研究の対象となっていなかったこの人物について、その著作や『鈴木修理日記』(寛文十(一六七〇)〜宝永元年分)を検討することにより、竹洞以下の人見家の人々や林鳳岡ら漢学者のほか、石田未琢(俳諧)・清水宗川(和歌)・福島国隆(幕臣、兵法学者)ら諸家との交遊

を確認し、和漢雅俗に渉るその文学活動・交流から、文学史上注目すべきことを論証した。

また、彼の著作『本朝外考』・『桑華詩編』・『倭賦引事』に見られる問題意識や方法論は、いずれも、中国の文化と本邦のそれを並置することで、自国の空間的・時間的把握に努めるという、寛文頃までの林家の修史事業の背景にあるものに極めて近い。さらに、『三韓詩龜鑑』の和刻に顕著だが、朝鮮への興味を看取できるのも、林家のみならず水戸家サロンや貝原益軒に共通するもので、長頼が、元禄期の江戸雅文壇における民撰地誌編纂に着目するに際して、ひいては学問・知のあり方を考えるにあたつて、看過することのできない重要人物たることを示している。

そして、鈴木長頼の文事は、林家とその周辺において蓄えられた膨大な知識・情報の一端を、学問的水準の一段下層へと下ろすことに成功しており、林家の詩文が、芭蕉をはじめとする江戸俳壇に影響し、それを構成する一員であつた人見香山(俳号午寂)のような人物によつて、享保江戸座俳諧にまで及んでいることを想起するとき、長頼のような人物の活動の検討は、その伝播の具体を解明するためにも欠くべからざる価値を有すると考えられる。

第二章 幕儒の学問と地誌(二) ——『豆州熱海地志』の成立と展開

次にその鈴木長頼(号秋峰)による地誌作品、『豆州熱海地志』(大本一卷一冊、元禄十二人見桃原・同年自序、同年人見必大跋、同十三年京中村五兵衛板)を取り上げ、近世地誌がいかなる情報源として成っているのか、そしてその情報がどの程度命脈を保つのかということなどの、基礎的な事項を明らかにし、近世前期の地誌の編纂と受容について考察する。

序文や『日記』によれば、本書は、落馬による怪我の治療のため熱海を訪れた際、当地で地誌を得られなかったため自ら記したものだという。しかし、実際には、その文章は多くを自身の師たる人見竹洞の紀行文「温泉日新録」(漢文、『竹洞先生詩文集』前集卷十九所収、以下「日新録」と略記)に依拠している(およそ二十二箇所)。

この『豆州熱海地志』は、初の本格的熱海地誌として、写本・刊本を問わず後続作に強く影響した。膳所藩儒寒川原清(辰清とも)の手になる『熱海言種』(写本、大本一卷一冊、享保二十一(一七三八)自序、編者自筆)をはじめ、『豆州志稿』(秋山富南編、写本、寛政十二(一八〇〇)自序)・『熱海温泉図彙』(山東京山編、岩瀬京水・溪斎英泉・歌川国安画、半紙本一卷二冊、自序、天保三(一八三三)年江戸山口屋藤兵衛刊)・『豆州熱海誌』(大内青鸞編、半紙本一卷一冊、中村敬字序、小野粹跋、明治十一(一八七八)年熱海真誠社刊)・『熱海温泉図会』(豊島海城編・画、半紙本一卷一冊、自序、亀谷省軒題辭、明治二十一年熱海万屋平治郎刊)の各書に、その一部の記述が継承されていったのである。

それはつまり、結果としてその源流である「温泉日新録」も、明治に至るまで間接的に影響を及ぼしたことを意味する。これは、林家の有する学問的権威と影響力に加えて、その情報としての利用しやすさ、すなわち平明で簡潔な叙述によるもので、啓蒙的性格を有する林家周辺の詩文の特色が遺憾なく発揮されたのだと言えることができる。官撰地誌の作者にも戯作者にも流用された事実がそのことを物語っていよう。

かかる流れは鎌倉に関する地誌の事情と酷似している。周知の通り、貞享二(一六八五)年刊行の

河井恒久編『新編鎌倉志』（大本九卷九冊、人見竹洞・東阜心越・力石忠一〔水戸藩儒〕序、柳枝軒跋）は後刷本も多く、広くかつ長きにわたり流布したことで知られる。水戸藩士編纂に係るこの地誌には徳川光圀の意向が反映していたこともあって、以後の同種の地誌に対する強力な拘束力を発揮し、寛政・文政期の地誌もこれに依拠するほどであったという（原淳一郎「近世における参詣行動と歴史意識——鎌倉の再発見と懷古主義」〔歴史地理学会編「歴史地理学」第47巻第3号、古今書院、二〇〇五年六月十日）。

また、同地は源氏による武家政権発足の地として、武士階級には特別の意味を有する場所であったことも、近世前期に地誌が編纂される要因の一つと言えるけれども、走湯権現がその篤い崇敬を受けたことをはじめ、熱海を含む伊豆地方もまた源頼朝とは浅からぬ因縁をもつ土地であり、熱海に関する地誌も、源氏の末流を自任する徳川の時代には、すみやかに編纂されるべきものであった。林家の周辺にあり、水戸家と通ずる竹洞を師としていた秋峰が、かかる時代状況に感じるところが無かったとは考え難く、『豆州熱海地志』編纂も、武士階級の人々の自己認識をめぐる知的欲求によってなされた『新編鎌倉志』と同列線上にあると見てよいだろう。

以上を要するに、鈴木長頼は、江戸初期に林家が担っていた啓蒙的役割が、次第に民間の知識人たちに移行してゆく過渡期にあつて、その時代の移り変わりを体現している人物と捉えられ、『豆州熱海地志』は、元禄期の知の流れのありさまを雄弁に語るとともに、林家周辺の知識の波及力を示す地誌として位置付けることができるのである。

第三章 地誌作者菊岡沾涼 俳諧からの出発(一) — 俳諧活動の実態

『江戸砂子』（享保十七（一七三二）刊）・『本朝世事談綺』（享保十九刊）・『諸国里人談』（寛保三（一七四三）刊）という、読本・草双紙作家をはじめとする他の文芸家に大きな影響を与えた地誌や説話集、そして類書等の編者として世に知られる菊岡沾涼^{きくおかせんりょう}は、享保期に活躍した雑学家としてよく知られるが、芳賀一晶・内藤露沾という当代の実力者に教えを受け門戸を張った俳諧宗匠でありながら、その活動の実態が把握されているとは言い難い。近世地誌編纂史上の重要人物も、その「本業」は俳諧にあり、当人もその自負があつたようである。俳諧に関する事績の整理・検証は、伝記研究の一貫として、地誌作者としての姿を見る前に押さえておかねばならない事であるのは言うまでも無いが、享保期の江戸座俳諧全体の動向を考える上でも決して無益なことではないだろう。本章は、沾涼の俳諧活動に関する事績を考証年譜形式にまとめ、それに若干の考察を試みんとするものである。その事蹟を粗々まとめると次のようになる。

沾涼は延宝八（一六八〇）年出生、元禄年中に出府。初号南仙で、享保元（一七一六）年の潭北編『汐越』（半紙本二冊、江戸桜木屋清兵衛・同板木屋甚四郎板、沾徳序、自跋）に発句一句入集するのが、現時点で確認される最も早い文事である。享保二年に絵俳書『百福寿』を編刊すると、二作（『続福寿』（同五刊）・『百華実』（同八刊））を立て続けに刊行する。同十二年に万句興（行）を行い立机。享保十七年には俳諧系譜書『綾錦』を著し、その編纂姿勢をめぐる沾洲（当時の主流派を代表する人物）に論難を受けて論争に発展。『鳥山彦』（『綾錦』後編、享保二十一刊）で反論を行う。寛保三（一七四三）年に

最後の俳書『藻塩袋』（発句注釈書）を発刊し、延享四（一七四七）年十月二十四日没。浅草誓願寺塔頭林宗院に葬られる（現存せず。別墓碑が伊賀市上野に現存）。

当時の俳諧選集への入集状況や、自作への序跋文提供者を中心に整理すると、菊岡沾涼は、当時の江戸俳壇にあつて主要な地位を占めることはついになかったと判断できる。

その要因の一つとして、当時の俳壇に、其角の洒落風を継承してその奇矯な俳風をさらにエスカレートさせた譬喩俳諧が流行していたなか、常に蕉風俳諧への敬慕の念を持ちつづけたことが挙げられよう。

実際、蕉風を慕う雪門系とは晩年に至るまで交流があつたようで、雑俳作者から出発し独自の活動を続けた桃翁とも親しかつた様子が窺われる。その系譜の先人たる蕉門俳人、桃隣はやはり江戸俳壇の趨勢に従わずに、江戸で唯一の蕉風継承者と目されていたという（松尾真知子『天野桃隣と太白堂の系譜並びに南部畔李の俳諧』（和泉書院、二〇一五年一月）。かかる存在に沾涼が親しみを覚えるのは自然なことだろう。

いずれにしても、かかる俳壇での主流派からの疎外とも言える扱い（純然たる撰集の刊行をなし得なかつたことも含む）が、俳書以外の地誌・説話集などの旺盛な執筆活動にも少なからず影響していると考えられる。すなわち、俳諧師としての活動を検証することで、江戸中期を代表する雑学家としての姿も自ずから鮮明になつてゆくのである。

第四章 地誌作者菊岡沾涼 俳諧からの出発(二) — 享保絵俳書の成立

その文学活動について概観したところで、次に沾涼の個別の著作について具体的な検討を加えてゆく。

享保期に絵入俳書の流行を見たのは周知のことと、その中心人物が露沾門の露月(前号識月)であつたこともまたよく知られるが、その流行の先陣を切つたのが、南仙(後号沾涼、露月と同門)の『百福寿』（享保二（一七二七）刊）と、その続編『続福寿』（同五刊）・『百華実』（同八刊）であつたという事実はいささか等閑に付されてきた感がある。本章では、なぜ沾涼の絵俳書シリーズが後の流行を招来しえたのか、その存在意義は那邊にあるのか、また、露月作品にも共通する享保絵俳書の特徴と文学史的意義などについて、若干の再考を試みた。

まず、絵師について概観すると、沾涼と知友の全角を主たる絵師とした初編が好評をもつて迎えられたのち、続編以降で飛躍的に多くの絵師が筆をとることになる変化が窺える。それによつて一書の画風が多様になり、単調に陥るのを防いでいると見ることもできる。この傾向は露月の後続作に引き継がれるとともに、享保以前の先行作との大きな相違点でもある。彼らが少なくない割合で句作者をも兼ね、沾涼・露月双方の絵俳書で繰り返し登場するのは、当時の江戸俳壇の人材の充実と絵俳書への積極的姿勢を示すことができる。

次に、取り上げられる題材を見るに、発句が一書を通じて共通の特定の題を詠み込んでいるわけではないため、描き出される画材は極めて多様で、伝統的な画題に交じつて、当代の風俗(とりわけ江戸の)を活き活きと写した句・画(遊女・節季候・見世物・行商・名所など)が散見されるのが重要な

特徴の一つである。また、画者の中には、英一蝶・奥村政信などの、江戸風俗画の祖と言うべき菱川師宣の後継に当たる当代の浮世絵師たちの姿もあり、江戸俳壇の周辺には当世の人々の営みを肯定的に捉え、あたかもそれを寿ぎ称揚するかのように視覚化せんとする気運や、それを歓迎する享受層が育まれていたと推察される。

これらの諸特徴は、先に述べたように、露月による絵俳書シリーズに引き継がれてゆく。露月絵俳書の挿絵も、浮世絵風の俳趣あるもので、体裁含め明らかに享保以前の絵俳書とは断絶があり、沾涼の作品と同趣向。画者名が明記されるのも共通の様式であって、その画者にしても、梅春・休栄・青柳斎・玉全・甫宥・泥翁・一漁・一蝶など『百福寿』・『続福寿』で筆をとっていた連中が多く描いており、露月が沾涼と同様の文化交流圏の中で絵を収集していたことがわかる。

露月絵俳書に呼応するように、立詠編『絵文匣』（享保七刊）や石仲子守範編・画『画図百花鳥』（享保十四（一七二九）刊）、初の色刷りの絵俳書である三升編『父の恩』（享保十五刊）など、実に多様な絵俳書が生まれ、享保期は空前の活況を呈するに至るのであり、その余波が幕末まで続くことを思えば、その先蹤としての沾涼絵俳書の文学史的存在意義は決して小さいものではあるまい。ことにその多色刷に関しては、露月の月次集の表紙にあしらわれたものが初発と見られ、享保江戸座俳諧の絵俳書をめぐる活動が、明和期に至つての鈴木春信による錦絵（東錦絵）誕生の揺籃となった側面を考えるにつけ、文運東漸前夜の江戸文化の興隆を示す一事として、享保絵俳書とその発案者は相応に評価されるべきなのである。

第五章 地誌作者菊岡沾涼 俳諧からの出発(三) — 俳諧系譜『綾錦』の盛行

俳諧系譜『綾錦』（享保十七（一七三二）刊）は、俳諧宗匠たちの系譜の整理を主眼として執筆され（序文）、江戸座の宗匠の点印譜や句メの模刻を載せるなど、重宝な書として好評をもって世に迎えられた沾涼の代表作の一つである。

しかし、既に見たように、江戸座の主導的立場にあった沾洲とその一派を軽視するが如き執筆態度により沾洲より批難を受け、沾涼もそれに対するに、『綾錦』の続編『鳥山彦』（享保二十一刊）で反論するという、論戦のきつかけを作った俳書でもあった。

そうした公正さを欠くという評価を一部に受けた執筆態度のため、また、より委細を尽くした後出の春明編『誹家大系図』（天保九（一八三八）刊）の影に隠れる格好になってしまっている故に、今日ではあまりその存在意義が評価されていないけれども、発刊当初から、俳壇の主流派からの批判が加えられたにもかかわらず、かく息長く流布することになったのは注目に値する。

本章では、その伝本の多き故に混雑し、明確になつていいるとはいえない刊行年・摺刷時期について、入木による改刻の痕などを手がかりに可能な限り整理し、成立事情についても考察を試みる。

これを整理すると、初板に続いて、四段階にわたる修訂本に分類することが可能で、さらに付載される蔵版目録によって、それぞれの摺刷時期を元文・延享・宝暦・明和・寛政・文化・天保頃と特定するに至った。さらには明治摺と思しきものも発見し、享保十七年から近代まで継続的に流布したことを証明しえたのである。

さらに、どのような性格のものか不明な点が残るものの、初板本よりも古体を示す岐阜市立図書館楠堂文庫本の写本(書物仲間による回覧本か)を座標軸の基準点と仮定して検討を加えることで、『綾錦』本文の初期の形態がほぼ判明し、それによって現存刊本のいずれが初板本に近いのか、また修訂によって本文がどのような変化をとげたかが明らかとなり、後印本の摺刷順序も自ずから整理されることとなった。板本研究においては時に、ともすれば単なる板本のコピーとして見過ごされがちな写本を加えることで、諸本の系統が浮彫りにされるということの好例と言うことができよう。

菊岡沾涼の作品は従来、地誌・説話集・考証随筆の類が価値あるものとして評価されてきた。しかし、こうして見てきたように、沾涼は俳書においてもその創作姿勢には何ら変わるところはなかった。すなわち、享保期を代表する雑学家としての沾涼の能力、具体的には企画力と総合力というべきものは、彼の俳諧活動とその俳書からも窺い知ることができるのである。さらに言えば、沾涼は、これまであまり省みられることのなかった俳諧師としての著作活動においても、遺憾無くその優れた力を発揮しており、それを見過ごしてしまつては地誌作者・説話収集者としての沾涼の姿をも見誤ることになりかねないのである。

第六章 地誌作者菊岡沾涼 地誌・説話編纂の方法(一)

——『諸国里人談』・『本朝俗諺志』とその系譜

享保から宝暦期に簇生した「奇談」群は、幕府の政策に端を発する享保期の学問奨励・庶民教化の気運の高まりの中で生まれたもので、「語り」に重きを置いた教訓・啓蒙的な内容を有していたが、その「奇談」書に含まれる菊岡沾涼による説話集『諸国里人談』(寛保三(一七四三)刊、以下「里人談」と略記)とその続編『本朝俗諺志』(延享四(一七四七)刊、以下「俗諺志」と略記)は、他書に比して直接的な教訓的言辞や、作者による批評が圧倒的に少なく、それが特徴となっている。

本章では、その作成過程の一端を窺うことにより、沾涼によるこれら二書の独自性、あるいはこれが「奇談」として扱われたことの意味などについて、地誌との距離感に着目しつつ考察を試みる。

『里人談』は、全百七十四話を「一 神祇部」・「二 釈教部」(以上卷之一)、「三 奇石部」・「四 妖異部」(以上卷之二)、「五 山野部」・「六 光火部」(以上卷之三)、「七 水辺部」・「八 生植部」(以上卷之四)、「九 気形部」・「十 器用部」(以上卷之五)の十部に分類し、目録では各話の題の下にその説話の舞台となっている国名を附記する。一方『俗諺志』は、全百三十七話で、分類はなされないものの、やはり国名を各話の題の中に組み込む形式(武州玉ふしうたま 川水かはのこほり など)をとり、説話ごとの所在を重視する。その内容も、諸国の神社・仏閣・名山・名水を中心に項目を立て、それに付随する形で縁起や由来に関する説話が語られ、分量は半丁にも満たぬものがほとんどで、余計な描写を極力排除した、簡潔を旨とする記述態度となっている。

これをまとめると、沾涼による説話集の最も重要な特色は、その〈地誌〉的な編集態度にあると指摘できよう。それが他の説話集と一線を画す要素の一つとなっているのである。「奇談」に含まれる、その他の諸国説話集類と比較しても、同様の特色を持つものは皆無と言ってよい。

その特色は何を要因とするか。実は、『里人談』・『俗諺志』の収録話には、沾涼の自筆資料二点、

『故郷の水』（享保十八（一七三三）成）・『熱海志』（延享元（一七四四）成）と共通するものが存在する。前者は京都への旅行の際の紀行文、後者は湯治で訪れた時に編じた地誌で、これらからの流用が、〈地誌〉的な特色の付与に繋がったと考えられる。

この後、宝暦期になると編集方針や内容が酷似した追随作が現れる。大拙東華著『齋諧俗談』（宝暦八（一七五八）刊、江戸板）・矢嶋西甫著『本朝国語』（宝暦十三刊、大坂板）がそれで、どちらも本文中に典拠として『里人談』を挙げており、『本朝国語』は序文において『里人談』・『俗諺志』を先行書として意識している旨をはっきりと示すなどしている。

さらに天明期にも、その系統に加える説話集が刊行される。寿鶴斎著『東国旅行談』（半紙本五巻五冊、天明九（一七八九）年江戸西宮新六板、以下『旅行談』と略記）である。『里人談』などとは異なり、「東国」という一地域（武蔵以東、下野・陸奥・出羽を中心とする）に限定したもののだが、編纂姿勢は明らかに『里人談』以下諸書を踏襲しており、項目も『里人談』や『本朝国語』と共通するものが多く、『里人談』の奥羽説話（十三話）はその全てが『旅行談』に合致し、『俗諺志』は八話のうち六話が、『本朝国語』の十一話のうち十話が『旅行談』と一致する。

これはすなわち、江戸で考案された様式が上方に流入し、それがさらに江戸に逆輸入されたことを意味し、沾涼の『里人談』・『俗諺志』が、一つの流行現象の発生源として相応の影響力をもったことを意味しよう。ここにも沾涼の卓越した編集能力が窺えるわけである。

第七章 地誌作者菊岡沾涼 地誌・説話編纂の方法(二)

——自筆稿本『熱海志』について

続いて、前章で触れた沾涼の自筆資料『熱海志』について考察し、翻刻を掲げる（要約では省略）。識語から、本書の旧蔵者は、沾涼の孫にあたる金工菊岡光行の養子となった光重と判明する。筆跡の他資料との一致とともに、この資料が沾涼自筆であることを証する要素と言える。

『熱海志』の内容は、先行の熱海地誌と比較しても、さして独自性があるというわけではないものの、それでも先行作品には見られない記事・説話を目にすることができる。例えば、今大路（曲直瀬）道三（医師）や堅誓上人（知恩院大僧正）が、温泉の効能を試す説話などがそれで、沾涼の興味の行方を探る上での手がかりになりうる。いずれも「事実」であるかは疑わしいが、人の耳目をひくに足る興味深い話である。二つの逸話はともに刊本『俗諺志』に組み入れられており、沾涼本人もその説話としての魅力を自覚していたと思われる。これらは恐らく沾涼と同時代のいわば世間話というべきものであり、かかる話の採用は先行作品や伝承のみに依存しないという編纂姿勢の表れとも言えることができる。

草双紙研究の成果として、沾涼の説話作品が、多くの黒本・青本作品に素材を提供していることが解明されているけれども、その一例ともなる流用が、さらに指摘できる。すなわち、鳥居清経画『伊豆温泉縁起』（安永元（一七七二）刊）は、書名からも察せられる通り、熱海を舞台とした仇討譚で、所々に内容とは無関係に地誌的情報が挿入される。とりわけ、仇討成功後の最終丁裏には話の筋とはまったく離れて、

まことにこの湯、万病をちするめいとう也。今大路道三先せい、こゝろみに竹三本前こにふしをこめておんせんにひたし、一七日過、一本をわれはゆ少あり。二七日に半ぶん有。三七日には一ぱいたるよし。

智恩院大そう正わうてきおしやう、こゝろみてくさはなのしほれたるを、わきいづるゆに入給ふとき、露をあけてさきだしのことくとあり。

(以下略、国立国会図書館蔵本による)

と、今大路(曲直瀬)道三・堅誓往的和尚の故事を記すのである。この部分は、『熱海志』から『俗諺志』へと流用された箇所(第六章参照)で、直接『熱海志』に拠ったわけではなからうが、既述の通り、管見の限り先行地誌には見えない『熱海志』独自の記事であり、かかる話が草双紙作者の興味をひいたというのは、刊本『俗諺志』にこれを特に取り上げた沾涼の説話収集者としての審美眼の確かさを示すものとして注目されるし、写本地誌に集積された知識・情報が板本を介して伝播してゆく様を伝えている点も看過しがたい事例と言えるだろう。

『熱海志』は、その土地に中世以来長く蓄積された説話・伝説だけでは飽き足らず、当世の見聞や世間話の類まで貪欲に取り入れ、現地の知識層による情報のほか、先行する地誌作品を摂取しつつ編纂されることで、先行作に見られない独自性を獲得したのであった。

第八章 江戸名物と享保俳諧 —— 絵俳書『名物鹿子』について

江戸自慢としての名物類聚であれば、まず屈指されるべきは、文運東漸後の安永期以後に簇出する所謂名物評判記の類と、その先蹤とも言うべき名物番付だが、洒落本・黄表紙等々の江戸戯作の隆盛と軌を一にするかかる現象に先んじて、俳諧の分野においては既に享保期に、その意図を同じくする試みが行われていた。それが、享保期江戸座の俳諧師露月の手になる『名物鹿子』(享保十八(一七三三)刊)である。本章では、その概要と文学史的位位置について考察し、加えて江戸名物の類聚という現象のあらましや、それが享保期に絵俳書という姿で顕現したことの意味について、若干の臆説を示す。

名所と同様に名物もまた、その土地の特色や価値を端的に象徴するものとして、古来重視されてきた地誌の一要素である。露月自身は地誌をものしてはいないが、名物の網羅は地誌編纂に準ずる営為と言える。また、沾涼の文学活動との時間的・空間的接近を思えば、本資料の検討により、前章まで述べてきた沾涼の活動を客観的に把握し、享保江戸座俳諧の文学史的意義を正確に捉えるための一助となると思われる。

享保以前の江戸名物を挙げた資料、『毛吹草』(俳書、松江重頼編、正保二(一六四五)刊)・『洗濯礎』(俳書、一雪編、寛文六(一六六六)刊)・『江戸鹿子』(地誌、藤田理兵衛著、貞享四(一六八七)刊)を確認すると、いずれも二十種前後で、内容も海産・農産物ばかりで種類に乏しいのに対し、『名物鹿子』は諸方の名人までも名物として取り入れ、一八〇種強にまで膨れ上がっていて対照的である。

このような江戸名物の「発見」は、都市江戸の経済的・文化的発展を背景としているのは言うまでもないけれども、それに加えて、編者露月による月次興行の存在を指摘しうる。享保九年から十

二年にかけてほぼ毎月行われた月次興行の成果を示した月次集には、探題興行の様子が記録されており、『名物鹿子』に共通する、江戸の寺社や町々を訪れる祈祷(門付芸人を含む)、商人・職人、さらには海上輸送されてくる諸商品まで、まさにありとあらゆる人物・事物が題となっているのが確認できる。

このように成された『名物鹿子』は、それまで寥々たる有様であつた江戸の名物のみを集めたことだけでなく、その情報を提供するという実用的な要請とは一線を画し、それ自体を楽しむ詠句の対象として蒐集したことに大きな意義が認められる。新奇の名物・名所・名人などをいち早く取り入れてゆく姿勢は、俳諧という文芸のあり方になうものであり、そこにはまた、眼前の江戸という町に対する肯定的かつ明確な自覚が看取される。この視点と江戸を語る語彙の増加こそが、後年の江戸戯作の興隆を準備したわけで、その文学史的意義は、同門の沾涼が編んだ地誌『江戸砂子』と並び、極めて大きいと言いうことができる。

第九章 化政期の江戸名所と俳諧 ——万賀編『風流江戸雑話懐反古』を中心に

前章まで、主に享保期を中心に、江戸文壇における地誌作者とその編纂の様相を窺ってきた。その結果、俳諧との関係が見逃せない要素であることが改めて浮かび上がってきたように思う。本章では、近世における俳諧と地誌の接点について、藩主酒井忠徳(ただのり)に仕え、江戸で点者としても活動した庄内藩士高橋弥五右衛門のものした地誌『風流江戸雑話懐反古』(写本、化政期成、以下「懐反古」と略記)を中心に考察する。近世地誌を文学史上に位置付けるに際して、それらがいかなる人間の手によつてなされたかを考えるのは、基礎作業として欠くことができない。また、近世後期の江戸における地誌編纂の一面を眺めることで、そこに集積されてきた都市「江戸」の物語の歴史と展開を概観する。

『懐反古』は、著者が江戸の四里四方の名所を巡り、その由来・来歴などを記したもの。四季ごとに部立てするが、各巻初めに「春の部東の方」・「日本橋より南の方豊嶋郡峡田領荏原郡馬込領の内／夏之部」・「日本橋より西の方豊嶋郡峡田領多摩郡中野領の内／秋之部」・「日本橋より北の方豊嶋郡峡田領岩淵領足立郡練馬領之内古跡神社佛閣之舊事を記／冬之部 上之巻」・「冬之部 下之巻」と記されており、実際には方角別。各項は「日本橋」・「両国橋」などと挙げられ、考証した後各巻の季節に従った発句を記す。現在確認しうる五本の成立順序は、岩瀬文庫本↓成城大学本↓国会本A↓国会本B↓国会本Cと想定される。

収録される名所とそれにまつわる説話を話型ごとに分類し、主要な江戸地誌と比較すると、次のような特徴を見出しうる。近世以前から続く伝統的な名所、和歌関連の歌枕や歌語などを含む一群は、「梅若塚」・「隅田川」(ともに巻二)・「渋谷金王桜」(巻二)などとおさえつつ、近世新たに生成した「両国橋」(巻二)や「神田のやしろ」(巻四)のごとき、江戸初期から著名な名所にとどまらず、享保以後の江戸地誌の傾向である俳諧や奇談・巷説に関わる名所も多数見受けられるという、極めてヴァリエティに富んだ充実したものとなっている。特にその巷説・実録(あるいはそれを材とする芝居など)に近接した名所説話の多さは目を引き、中には実際の仇討ち事件に取材する話も見え、写本

という媒体ゆえの特色も有するものの、全体としては沾涼の『江戸砂子』との近似を指摘できる。折しも、『懐反古』成立の前代安永から寛政にかけて、江戸・上方俳壇双方に名所の概説や集成を試みた書物が続刊されていた。『江戸近在所名集』（三世一漁編、安永三（一七七四）刊、江戸板）・『同後編』（同五刊、江戸板）・『俳諧名所方角集』（素外編、安永四刊、江戸板）・『俳諧名所小鏡』（寛政七（一七九五）刊、京板）などで、いずれも、俳壇の蕉風への回帰と、その付合重視の風潮を受けた付合作法書であった。

すなわち、『懐反古』は、地名への関心が高まる俳壇の趨勢と、享保以来高揚した江戸文化への関心が深化し、さらに細分化された地域ごとの地誌が編纂される気運を背景に生まれた作品と位置付けられるだろう。

第十章 再生される地誌 ——『東国名勝志』とその依拠資料をめぐる

ここまで元禄・享保期そして化政期の、江戸文壇で編まれた地誌類と文学の関係性について考察を進めてきた。時期が前後してしまいうけれども、最終章では宝暦期の大坂出版界に目を転じ、享保七（一七三二）年に布告された出版条目の一項（「割印帳」冒頭の記載による）、

一、何書物によらず此後新板之物、作者并板元之実名、奥書為致可申候事

（朝倉治彦編『享保以後江戸出版書目新訂版』（臨川書店、一九九三年十二月）による。私に説点を付した。大和博幸）

によつて生じた板木所有者の権利を積極的に運用することによつて、性格上常に類板の危険性をはらむ地誌が、いかなる転生を遂げるのかについて考察する。これはまた、近世地誌の受容の問題を考える上でも有益と思われる。

近世中期、宝暦十二（一七六二）年に、大坂の著名な書肆吉文字屋市兵衛によつて刊行された『東国名勝志』（鳥飼醉雅著、大本五卷五冊、自序、無跋）は、書名が示すように、日本の一地域に関する地誌（正確には名所絵本）である。当時としては精巧で、魅力的な鳥瞰的描写を用いるこの作品は、この直後から上方で勃興する、やはり細密な絵を特色とする名所図会シリーズに先駆ける重要な位置を占めているにもかかわらず、これまでその内容や文学史的位置付けなどが検討されることはなかった。

子細にその内容を検討すると、その絵や地誌的記述に、遠く時を隔てた元禄期の地誌類の利用を指摘できることが判明する。具体的には、井原西鶴による日本地誌『一目玉鉾』（大本四卷四冊、元禄二（一六八九）刊）と、『東海道分間絵図』（大型折本五卷五帖、遠近道印作・菱川師宣画、元禄三序刊）が主たる典拠であり、さらには菊本賀保の著作にかかる『国花万葉記』（日本地誌、横本十四卷二十一冊、元禄十（一六九七）刊）も利用されることを、それぞれの比較や、当時吉文字屋が西鶴本の板木を収集していた事実などを史料によつて跡付けることができるのである。

また、特にその絵に着目すれば、精細な俯瞰図的・鳥瞰図的図様の変遷をたどると、『東国名勝志』は、正徳・享保期に上方で簇生した『扶桑名勝図』シリーズや橘守国の絵手本類と、名所図会シリーズの中間に位置することになる。すなわち、絵本と地誌の融合という名所図会シリーズの発想の典範と位置付けうるのである。旧来、名所図会の源流として、『一目玉鉾』や『東海道分間絵

図』を想定する見方があったけれども、その双方を典拠とする『東国名勝志』は、まさにその流れを証する存在だと言えるだろう。さらに、その図様は、楡形惠斎の鳥瞰図「日本名所の絵」（木版多色刷、近世後期刊）に影響した形跡もあり、近世の空間認識の展開を考察する上でも、極めて重要な資料と思われる。

そしてまた、『東国名勝志』を、『一目玉鉞』の改題本『東海道名所図会』（大本一巻一冊、鳥飼少人序、寛政七（一七九五）刊）・『日本海陸道中図会』（大本四巻四冊、天保三（一八三二）刊）と並置すること、西鶴本、特に従来評価の低い『一目玉鉞』の需要の高さが示され、そのいずれにも関わった吉文字屋市兵衛の卓抜な編纂能力と、同書肆が近世の民撰地誌編纂史においても看過すべからざる存在たることが明らかになるのである。

結論 総括と今後の展望

林家の学問と地誌 幕府の学問的ブレイクとなった林家とその周辺に蓄積された知識・情報が、近世文化のあらゆる分野の土台になっていることは周知の事実ながら、地誌の分野においてもそれが確認された。林家の学問に近く、幕府御大工頭という実務官僚を務め、幕府の歴史認識を具現化する立場にあった鈴木秋峰の『豆州熱海地志』は、師たる人見竹洞の文章を全体に利用し、そのことによって権威と説得力を得た同書は、様々な後発の地誌類に取り込まれて、結局明治にまで影響力を保つに至ったのであった。

もちろん、『新編鎌倉志』の例のように、礎となったのは林家だけでなく、やはり一大修史事業を展開して、それと拮抗する勢力・文化圏を築いていた水戸藩の存在も見逃すことはできない。秋峰もまたそちらへも接近していたのである。つまり、雅文壇全体の近世地誌に対する影響力というものを分析し、幕初の自己認識がいかに反映するかを考察せねばならない。

また、秋峰の公務の実態を解明し、実際の建築に携わる彼の空間認識や、それが地誌をはじめとする彼の文事にいかに関わるかなどについて明らかにする必要がある。それは、秋峰が江戸図の改訂に携わったことや、職人集団と説話という問題にもつながるはずである。これらは以後の課題となろう。

〈江戸〉文化の自覚と享保俳諧 本論の成果の一つは、これまで等閑に付されてきた享保江戸座俳諧の、文学史的・文化史的意義について再考する必要性を提示し、その一步を踏み出せたことである。前期の元禄、後期の化政文化に偏する傾向がある中で、中野三敏氏が十八世紀すなわち享保・宝暦期の文化に光を当てるべき旨を提唱されて久しいが、享保の江戸座俳諧については未だ正当な評価が与えられているとは言い難い。

本論では、菊岡沾涼・豊島露月を例として、その作品に現れた都市江戸とその時代を寿ぐ姿勢と、それを可能にする文化的成熟の様を見た。従来、江戸に文化の中心が移り、「江戸っ子」なる自文化に自覚的な世代が出現するのは、所謂文運東漸以後の明和・安永期（十八世紀中頃）以後とされてきたけれども、その萌芽は明確に享保時代、それも鋭い現実認識が要求される俳諧分野にあつ

たのである。芭蕉の高弟でありながら、師の俳風とは対照的に華美を好んだ其角の都会人的感覚を継承する江戸座に、かかる気風が醸成されるのは当然の成り行きで、そのことは学界にも感覚的には共有されている。しかし、だからこそ具体的な事例と共になされる論証が今求められているであり、今回その一端を明らかにすることができたと思う。

享保江戸座俳諧が〈江戸〉文化自覚の表れたることは、江戸戯作の担い手たちによって思慕・祖述された事実が如実に示している(序論参照)。換言すれば、黄表紙・洒落本などの、江戸を舞台として当代を克明に描写する現代小説の登場を準備したのが、先述の沾涼や露月に代表される江戸の地理的・文化的掘り下げであったわけである。『江戸砂子』と『名物鹿子』はその象徴ということができるが、このことはもつと重視されてよいと思われる。

「名所図会」の時代へ 第九章・第十章では、享保以後の地誌のありようについて検討を行い、その結果として、沾涼の地誌を含む先行作が、化政期の江戸地誌にいかに取り込まれていたか、具体的には、江戸時代になってから生成された新名所が、享保を画期として増加している事実を明らかにした。江戸という土地への認識の深まりが、地誌作品に反映し、それを俳諧が媒介している様子を改めて確認することができたわけである。そして、その江戸賛歌とも言うべき自己認識の果てに『江戸名所図会』が登場することになる。

これまで『江戸名所図会』に関しては、やはり歴史学を中心に優れた分析が存する(たとえば、千葉正樹『江戸城が消えていく『江戸名所図会』の到達点』〈歴史文化ライブラリー²³⁹〉(吉川弘文館、二〇〇七年九月)けれども、本論のような視点で具体的にどのような説話が流入し、また捨棄されているのかについては明らかにされていないように思う。この点についても後考を期したい。

今後の展望 さて、これまでも示してきたように、今後なすべき課題は多いが、既述以外の展望についてもいくつか記して擲筆することとする。

まず、秋峰研究では、林家との接点だけでなく、先述の水戸サロンに加えて、貝原益軒の思想との比較検討が喫緊の課題と考えられる。益軒は説話収集家・地誌作者という点で、沾涼の著作にも影響力を有しており、本論を深化させてゆくために、あらゆる点において避けることのできない人物である。

また、本論で提示した仮説を補強するための、それぞれの具体例のさらなる提示が求められる。なかでも、沾涼ら享保期の地誌作者が、前世代の林家の学問知識をどの程度、どのように受容していたかの事例を示したいと考えている。現段階でも、『江戸砂子』(地誌)や『本朝世事談綺』(事物起源)・『藻塩袋』(俳諧注釈)のいずれにも、林家の詩文や著作が利用されているのを確認しており、影響関係の全体的な把握の必要性を感じる。

俳諧との関わりの点では、今回は江戸座に偏することになってしまったが、それを相対化するためにも、その前代にあたる江戸蕉門、とりわけ芭蕉・其角という、江戸の町に大きな足跡を残した俳人の存在が、新しい江戸名所の生成にいかに関わったかを、改めて検証せねばなるまい。

享保期の江戸における名所生成を考究する際、江戸座俳諧のみならず、当時大いに流行し、また

都市江戸をその題材とすることが多かった荻生徂徠・服部南郭ら護園派の詩文にも目を向けねばならないだろう。当時の学芸界の潮流を背景に、徂徠が全国の説話に興味を抱いていたのは本論でも指摘したが、極めて即物的な思考を尊ぶ徂徠学派が、都市としての江戸という眼前の景物を、いかに捉え描写したかという問題は、彼らが超克せんとした窮理の学としての朱子学を究明するための比較対象としても重要で、究明すべき課題の一つとなる（そして、これは護園派を慕った大田南畝の江戸描写の問題にも派生する）。

今後とも江戸を中心にした考察を進めたいと考えているけれども、これまたその相対化のためには、全国の地誌全体についても目を向ける必要がある。その中でも、第十章で少々触れたように、「東国」の地誌とそこに表れる歴史意識にも、三都には無い特有の性格が備わっており、それらへの考察を手がかりに「日本」とは何かという大きな問題にも迫ってゆきたい。

そのほか、地誌の空間把握に対置すべき、時間把握の表象としての年中行事・歳時記『続江戸砂子』以後、江戸地誌にも付載される（についてや、享保期を中心とする新作能と地誌・名所の関係についてなど、追求すべき課題は多岐にわたるので、これらを系統立てつつ検証を進めていく所存である。

〔初稿一覽〕

本論を構成する各章の初出と題目は以下の通り。いずれも本論の成稿にあたり修正を施し、大幅に加筆している。

序論 新稿

第一章 「幕府御大工頭鈴木長頼の文事」〔近世文藝〕 105〔日本近世文学会、二〇一七年一月十五日〕

第二章 「近世地方地誌の生成と伝播——鈴木秋峰『豆州熱海地志』を例として——」〔成城国文学〕 第二十九号〔成城国文学会、二〇一三年三月二十三日〕

第三章 「菊岡沾涼の俳諧活動」〔成城国文学〕 第二十号〔成城国文学会、二〇〇四年三月二十三日〕

第四章 「菊岡沾涼の絵入俳書」〔成城国文学〕 第二十四号〔成城国文学会、二〇〇八年三月二十三日〕

第五章 「菊岡沾涼『綾錦』の成立と諸本——板本と写本と——」〔連歌俳諧研究〕 第百十三号〔俳文学会、二〇〇七年三月一日〕

第六章 「近世説話の生成一斑——菊岡沾涼『諸国里人談』・『本朝俗諺志』と地誌——」〔成城国文学〕 第二十五号〔成城国文学会、二〇〇九年三月二十三日〕

第七章 「菊岡沾涼自筆『熱海志』（杏雨書屋蔵）について——解題と翻刻——」〔杏雨〕 第十五号〔武田科学振興財団、二〇一二年五月三十日〕

第八章 新稿

第九章 「俳諧師の江戸地誌——写本地誌『風流江戸雑話懷反古』の紹介を兼ねて——」〔民俗学研究 所紀要〕 第三十八集〔成城大学民俗学研究所、二〇一四年三月二十五日〕および「万賀編『風流江戸雑話懷反古』について——庄内藩士の俳諧と江戸地誌——」〔松代・一関・南部・秋田各藩の和歌活動・俳諧活動による大名文化圏形成解明の新研究（基盤研究C）〕〔岩手医科大学教養教育センター文学分野平林香織研究室、二〇一六年三月〕

第十章 新稿

結論 新稿